

底辺女性史へのプロローグ

「からゆきさん」と呼ばれた一群の海外売春婦について書こうとして、いま、こうして机に向かってみると、わたしの臉には、四年前の秋のある日、天草は下島の南部にあたる崎津町の天主堂で見たひとつの光景が、強く浮かびあがってきて消え去らない。——そのときわたしは、からゆきさんを求めて出た二度めの旅の途中で、この旅が無駄な旅に終わるかもしれないという不安をいだいており、その不安をいくらかでも鎮めようと考へるともなく考へて、バスから降りるとすぐ、ひらべつたいた民家の屋根の上にひとりわ高くそびえる暗灰色の尖塔を目あてに、その天主堂の前に立つたのであった。

暮れやすい秋の日が、西の山の稜線に近かつた印象の残っているところからすれば、時刻は午後の三時頃であつたろうか。人が家のなかに閉じこもつてしまふ時間ではないのに、天主堂のあたりには、おとなはもちろんのこと子どもの遊ぶ姿さえなく、崎津の町は死に絶えてでもしまつたかのように静かだった。天主堂のうしろはすぐに海で、外海から深く湾入しているためかまるで鏡のような水面に、十字架をいただく尖塔が影を映していた。



はじめて客を取らされる前日の写真
(左より、おさき、おはな、ツギヨ)

美しい、あまりにも美しいこの風景に、単なる観光客としてやって來たのであるならば、わたしはどれほど感激し、どれほど心をのびのびとさせたかしれないと思う。しかし、遠く海外に流浪してわれとわが身を売らなければならなかつた天草の同性たち——その彼女らの眞の姿と声とをこの手につかもうとしてはるばると訪ねて來たわたしには、この美しくてしかも静かながめは、なぜか言いようもなく悲しく感じられたのであつた。

そしてその悲しい氣持は、時の経過とともにいよいよ深くなつて行くのだったが、そんなときであつた——わたしは、あの、ひたすらに祈る年老いた農婦の姿に接したのは！

まるで人気がないままに、開けひろげの扉から天主堂のなかに入り、外の光線になれた目で内部を見渡して、祭壇の前にうずくまるひとりの人間を認めたとき、わたしは、祈りの姿勢に彫つた等身大の石像が置かれているのだ信じて疑わなかつた。畳の上に正座し、ロザリオを掛けた両手を合わせたその老女が、いつまで経つても声ひとつ出しもしなければ、身じろぎもしなかつたからである。けれども、暗い天主堂内部に目がなれてきて、正面のキリスト磔刑像からマリアの像、祭壇の燭台のひとつひとつ、そして両側の窓を彩るステンドグラスに至るまではつきりと見て取れるようになると、わたしは、その石像と見たものがじつは生身の老農婦であることに気づき、自分の迂闊さに驚くとともに、そんにも長く、そんにも深く、そんにも一心に祈らないではないいられない老いた農婦の存在に、はげしく心を打たれたのであつた。

その農婦の年齢は七十歳から七十五歳までのあいだとわたしは見たが、天草両島や島原半島に

ひつそりと生き残つてゐるはずの「へからゆきさん」たちは、現在、いずれもそれくらいの年になるはずである。この石像のように祈る老農婦が、かつて海外売春婦であつたかもしれない——など想像することは、むろんこの上なく乱暴であるが、しかし彼女は、いったい何をみずからのお神に祈念していたのであろうか。

四年余の歲月をへだてた今でも眼前に在るようを感じられる彼女の顔には、幾筋もの太い皺が刻まれ、手の指は短くて節くれ立ち、そして働き着の肘や膝のあたりには柄ちがいの継ぎ布が当てられていた。その服装は彼女の暮らしの貧しさを示し、顔の皺はこれまでの人生航路の多難であったことを示すとすれば、彼女の深い祈りの真意は、人間の原罪の消滅とかいつたような觀念的な希求ではなくて、窮屈するところ、その貧苦の人生より救わたいという切ない願いにあつたと書いても、決して言いすぎではないだろう。

周知のとおり「へからゆきさん」とは、「唐人行」または「唐人國行」ということばのつづまったくもので、幕末から明治期を経て第一次大戦の終る大正中期までのあいだ、祖国をあとに、北はシベリアや中国大陸から南は東南アジア諸国をはじめ、インド・アフリカ方面にまで出かけて行つて、外国人に肉体を鬻いだ海外売春婦を意味している。その出身地は、日本全国に及んだが、特に九州の天草島や島原半島が多かつたといわれている。「彼女たち」が、天草や島原から殊更に多く生まれたのは、後章に述べるように、根本的には天草や島原の自然的・社会的な貧困のためであるが、そうであれば、「へからゆきさん」と天草・島原の貧しい農民女性とは、疑いもなく

同じ幹から分かれ出た二本の枝だということになる。崎津の天主堂の祭壇に石像のごとく正座して動かない老農婦が、その人生の苦しき耐えがたきを訴える声なき声は、本質的にへからゆきさんへの内心の声と同じであるはずだ。

夕日が山の肩にかかるかしだいに暗くなっていく天主堂のなかで、わたしは、新たな思いで心に誓つた——この年老いた天草の農婦の声なき祈りを聞き分けること、それが女性史研究を志すわたしの「仕事」なのだ、と。そして、ようやく祈りを終え、ロザリオを納めて立ち上がつただんの農婦が、闖入者のわたしを咎めもせず、あるかなしかの会釈をして天主堂から去つて行つても、なおわたしは、その場を動くことができなかつたのであつた——

忘れ得ぬままに思わず個人的な回想を書きつらねてしまつたが、読者のなかには、女性に関する問題は他にもたくさんあるというのに、どうしてわたしが、すでに遠い過去の淡い記憶となつてしまつたへからゆきさんへにそんなに執心するのかと、疑問をいたかれる方があるかもしれません。それに答えるのはなかなかむずかしいことだけれども、端的に言えば、かつて天草や島原の村々から売られて行つた海外売春婦たちが、階級と性という二重の桎梏のもとに長く虐げられてきた日本女性の苦しみの集中的表現であり、ことばを換えれば、彼女らが日本における女性存在の「原点」をなしている——と信ずるからである。

すこしばかり飛躍するが、これまで日本の歴史書は、奈良時代の『日本書紀』から今日の多くの歴史全集に至るまで、その大半が、支配する性としての男性によつて書かれてきた。マルクス

主義の思想と方法が導入された昭和初年代以降になつて、労働者・農民の利益に立つた歴史書がこころみられるようになつたけれども、それらとても、男性の立場に固執している点では変わりがなかつた。そして昭和二十年、第二次世界大戦における敗戦によって日本帝国主義が崩壊し、女性にも政治的・社会的な諸権利が保障されるようになつてはじめて、「女性史」というものが成立するようになるのだが、しかしわたしに言わせれば、それらの女性史は、ごく少数の例外のほかは、いずれも一部のエリート女性の歴史であつて、決してそれ以外のものではないのである。

たとえばそれらの女性史は、多くの場合、近代の開幕は明治五年の津田梅子らのアメリカ留学をもつて記し、つづいて自由民権運動のたたかい手としての岸田湘煙や福田英子の活躍や、自我のめざめを感覚の次元において声高らかにうたい上げた与謝野晶子の仕事などについて述べ、さらに日本のブルー・ストッキング運動である平塚雷鳥らの「青鞆」に言及していくという定石を踏んでいる。いわば、ブルジョアジーあるいは中間層から出たひと握りのエリート女性たちの思想と活動を、頂点と頂点とを結んでつくる折線グラフのようにつなぎ通つたものである。こうした女性史から、労働者や農民として生き死にした無数の女性の生活と鬱屈の思いを読み取ることは、およそ不可能だと言わなくてはならないだろう。

わたしは、エリート女性史を、かららずしもすべて否定しようとするものではない。なぜなら、専門的な学問や技術を身につけた近代エリート女性には、時代を進展させて行く上において彼女らでなくしては担えない仕事があるはずだ——というふうに考えるから。けれども、極地に浮かぶ

氷山にたどえるならば、いわゆるエリート女性は氷山の海上に突出した部分にすぎず、海中にはその数十倍にもおよぶ巨大な氷塊——労働者・農民階級の女性たちが、重く深くその身を沈めているのである。そして、そういう底辺の女性たちの実態に迫り、その悲しみや喜びの核心をつかんだ史書でなければ、本当の女性史と評価することはできないのだ。

従来の女性史にたいするこののような批判をもつとも具体的・効果的におこなうためには、女性は、せめて、エリート女性と対蹠的な生き方をした底辺女性のひとりについてだけでも書き綴つておきたいと思ったのだが、しかし、それでは、どのような存在がエリート女性史への強力なアンチテーゼとなり得るのか。そう考えたときわたしの脳裡に浮かび上ってきた女性像こそ、ほかならぬ「からゆきさん」だったのである。

あらためて述べるまでもなく近代日本の社会は、製糸・紡績などの軽工業に多く依存して築き上げられたものであり、そこに働く女性たちの犠牲の上になりたっていた。全国いたるところの農村から、いわゆる口減らしのため東京・大阪・長野などの機業地に年季奉公に出た娘たちが、どれほど苛酷な労働生活を強いられたかは、古く明治三十年代の調査『職工事情』や大正末期に細井和喜蔵の書いた『女工哀史』、近くは山本茂実の『あゝ野麦峠』などであきらかにされる。また、米をつくりながらその米を食べる「こと」もできずに炎天下の泥田を這いまわらなければならなかつた農婦や、選炭作業は言うにおよばず、カンテラひとつを頼りに数千メートルの地底

に降り、熱気に蒸されつつ炭層に挑んだ炭鉱婦たちも、近代日本の繁栄を告発する資格を十分に持つてゐる存在である。なお、これに加えて、年少労働としての子守奉公や、あらゆる仲間や知人から切り離されて他家の家の労働に従わねばならなかつた女中なども、同じ底辺に呻吟して生きた女性たちと見なしてよいだろうと思う。

しかし彼女たちは、長時間労働・低賃金・最低生活を強いられていたとは言うものの、恋をする自由はあつたし、結婚しようと思えばできなくはなかつた。恋愛という感情が人間の内面の「自由」の領域に属するものだとするならば、彼女たちは少なくとも、その領域が自分のものであるという誇りを持つことだけはできたはずだ。つまり彼女たちは、労働力は売つたけれども、それ以外のものを売りはしなかつたのである。

ところが売春婦は、もともと人間の「内面の自由」に属しているはずのセックスを、金銭で売らなければならなかつた存在である。労働力をひどい低賃金で売つて生きる生活と、セックスまでも売らざるを得ない生活と、どちらがいつそう悲惨であるか！

もちろん、ひとくちに売春婦とは言うものの、その在りようや境遇は、かららずしも同一ではない。公娼が無くなつた第二次世界大戦後の日本では、売春婦といえどもなおさず、街頭で行きすりの男の袖を引く私娼を意味するが、それより前の時代にあつては、売春婦といふことばの内容は複雑であった。俗謡や踊りなどの芸を売物に酒席にはべる芸者を上として、下には東京の吉原・洲崎・新宿などの遊廓に働く公娼や場末の街の私娼があり、さらにその下には、日本の国

土をあとにして海外に連れ出され、そこで異国人を客としなければならなかつたへからゆきさん」という存在もあつたからだ。そして、これら幾種類かの売春婦たちのどれがもつとも悲惨であつたかと問うことは、あまり意味をなさないことかもしれないが、それでもあえて問うならば、おそらく誰もが、それは海外売春婦であると答えるのではなかろうか。

芸者・公娼・私娼など国内の売春婦は、同じことばを話し、同じ生活感覚をもつてゐる日本人が客であった。むろん、なかには明治初期の開港地におけるへらしゃめんや、敗戦後のヘパンパン・ガールなどのような例外もあるが、しかし彼女らが相手とした外国人はおおむねヨーロッパ人かアメリカ人であつて、後進国として西欧追随の道を歩みつつあつた日本であつてみれば、それらの国の男たちを客とすることは、彼女らの現実の意識においてはそれほど屈辱的なことではなかつたと言えよう。けれどもへからゆきさんたちが売られて行つた外国は、ヨーロッパやアメリカではなくて、日本よりももっと文明が遅れ、それ故に西欧諸国の植民地とされてしまつた東南アジアの国ぐにであり、そこでの客は、主として中国人やさまざまな種族の原住民であつた。彼女らに限つて当時の日本人一般をひたしていいた民族的偏見から解放されていいたということはないから、ことばは通せず、肌の色は黒く、立居振舞の洗練されていない原住民の男たちを客に迎えることにたいしては、おそらく非常な屈辱感を味わつたにちがいない。そしてこの観方が誤つていないとすれば、近代日本におけるあらゆる売春婦のうち、からゆきさんが、その現実生活において悲惨だったばかりでなく、その心情においてもまた苛酷を極めた存在であつた——とあかしとなつてゐる。

言わなくてはならないのである。

近代日本百年の歴史において、資本と男性の従属物として虐げられていたものが民衆女性であり、その民衆女性のなかでももつとも苛酷な境涯に置かれていたものが売春婦であり、そして売春婦のうちでも特に救いのない存在がからゆきさんであるとなれば、ある意味で、彼女らを日本女性の「原点」と見ることも許されるのはなかろうか。従来のエリート女性史に対するアンチテーゼの序章とするのに、わたしが、製糸・紡績女工でもなければ農婦でもなく、炭鉱婦でもなければ女中でもなく、殊更にからゆきさん——東南アジアへの出稼ぎ売春婦を選んだ由縁である。わたししながらゆきさんを取り上げたかということは、以上で理解してもらえたと思うけれども、仔細に見ていけば、これまでにも海外売春婦についての研究が無かつたわけではない。たとえば、森克己の『人身売買』は、天草島の歴史と人口問題に密着しつつ出稼ぎとしてのからゆきさんの全貌に迫ろうとした貴重な研究であり、宮岡謙二の『娼婦——海外流浪記』は、数千冊の旅行記にもどづいて、いつどこにどのような日本人海外売春婦がいたかということを復元して見せてくれた立派な文献である。また、宮本常一らが編んだ『日本残酷物語』や折口民俗学派の人びとが書いた『日本人物語』、村上一郎・鶴見俊輔編の『ドキュメント・日本人』や谷川健一の『女性残酷物語』などには、海外売春婦の概説や聞書が收められており、それぞれ編者の慧眼の

つ、どうしても書きもらすことのできない文献に、『村岡伊平治自伝』の一冊がある。昭和三十年に南方社から出版されたA5判二百四十頁ほどのこの本は、村岡伊平治というひとりの海外売春婦誘拐業者が、明治時代の中期から昭和十年代の初めまでシンガポールやマニラなどで遊廓経営をした体験を、あからさまに述べたといわれる自叙伝である。海外売春に携わった当事者の書き残した資料が他に皆無という事情もあり、またその内容がいかにも面白いので、この書物は、上述したすべての海外売春婦研究において最も重要な資料とされている。いや、より精確に言うならば、『村岡伊平治自伝』に依拠することによつて、前記の海外売春婦研究が始まったのだ——ということになるかもしれない。

しかしながら、わたしが現在までの調査その他によつて得たデータでは、『村岡伊平治自伝』の内容は事実の誤りがきわめて多く、歴史資料としてはあまり信用することができない。とすれば、その論理的必然として、この特異なアウトロウの自伝に全幅の信頼を置いて成り立つていて森克己以下のいくつかの海外売春婦研究は、根底から揺らがざるを得ないという結論になつていいのである。

わたしは『村岡伊平治自伝』の信憑性を疑うのは、ほぼふたつの理由にもとづいている。その第一は、東南アジア開発関係の文献は多く、またかつて彼の地で活躍した人びとも少なからず現存するというのに、自伝で述べているような伊平治を認知する証言が皆無であること、その第二は、自伝本文の記述がしばしば客観的資料の示す事実と合致しないことである。

まず、第一の点から触れていくなら、東南アジア開発についての文献には、明治・大正期に外務省や農商務省が官庁資料としてまとめたさまざまな調査文書のほか、民間団体が出版した開拓史や個人が書いた回想記・旅行記などがあつて、その量は決して少ないとは言えない。狭い日本列島に一億の人が住む今日の日本社会の常識でみれば、これらの文献のなかにその名を発見できないからと言つて伊平治の存在を疑うのは、行き過ぎのそしりをまぬがれぬだろう。けれども、明治期から大正期にかけての東南アジアでは、日本人は、(平面)を占めることはもちろん、(線)をなして住むにも至らず、シンガポールとかマニラとかダバオとかいったところに、わずかに(占)として生活しているにすぎなかつた。したがつて、東南アジアは広いにもかかわらず、そこにおける日本人社会は極めて狭く、善事にせよ悪事にせよ少しでも目立つ仕事や事件に関与したならば、その人物の名はすべての日本人に知られ、かならずやどれかの文献に残る公算が強いのである。後章に詳述する木下クニをはじめとして、仁木多賀次郎とか渋谷銀治とかいったいわゆる女郎屋の親分たちの名が、入江寅治の『邦人海外发展史』など信頼するに足る史書に幾人も記載されているのはそのためだ。

こうしたことがらを念頭に置いて考えるとき、村岡伊平治の名がどのような文献にも全く見当らぬということは、何を意味しているのだろうか。わたしは読者が、『村岡伊平治自伝』をすでに読了しているという前提のもとに話を進めすぎたようだが、未読の人のために言うならば伊平治は、その自称するところによるなら、明治二十二年から二十八年までのシンガポール時代には、

前科者收容所を設立して婦女誘拐業の元締となり、明治二十九年から三十三年に至るセレベス島時代には、スラバヤの「名譽領事」に任命され、そして明治三十四年から昭和十八年におよぶフイリッピン時代には、「親分」とも「南洋の金さん」とも呼ばれて、「いたるところで、日本人はもとより、外国人でも拙者を知らぬ人はないようになつた」という男である。これだけの活躍をした人物が、東南アジア開発関係のいかなる記録にもその名を留めていないことは、伊平治の存在それ自体は疑わぬまでも、わたしたちをして、少なくともその三面六臂の活躍を何ほどか割引いて考えさせずにはおかないのである。

こうした事実に加えて、村岡伊平治とほぼ同時代に東南アジア各地でさまざま仕事をした人物の現存者に、伊平治を知る者のほとんど無かつたということがある。わたしは、後章で述べる天草下島への旅において、シンガポールやマニラやレガスピーにいたという八、九十歳の老からゆきさんを十数人訪ねてみたのだが、彼女らの記憶のなかには、「村岡伊平治」という名前も、「南洋の金さん」という俗称も共に無かつた。そしてわたしが、『村岡伊平治自伝』から得た知識によつて、伊平治の前科者や売春婦たちに対する一種の温情主義を披瀝すると、彼女らは、「女郎屋の親方ちゅうもんはいつもこいつも女のひもで、わしらの生血を吸うことば考へちよつたけん、そげな人情ある親方があれば知らんこつはなか。やりもせんことをほら吹くようなそげな男は、南洋には腐るほどおつた」と、わたしを嘲笑するような口調で答えたのであった。

またわたしは、からゆきさん以外の東南アジア在留者をも可能なかぎり訪ねてみたのだが、そ

こでも同じ失望を味わつたのである。たとえば、そのなかには、シンガポール在留邦人の草分けとして多くの書物にその名が見られる笠直次郎の長女笠アサカさんもあり、シンガポールで生まれ育つた彼女は、父親から、女郎屋の親方を含めて主だつた在留邦人の名を耳にたこができるほど聞かされていたといふのに、村岡伊平治の名は初耳だとのことであつた。唯一の例外は、かつて「ダバオ日々新聞」の副社長であり、現在福島県の郡山に住んでいる星篤比古氏で、彼の証言によれば、数年前に亡くなつた妻の旧姓西岡シゲさんが伊平治を知つていたことだが、しかしその彼女も伊平治を、「あんなうそつきの男——」と評していたといふ話である。

このような次第で、文献からも人間からも証言を得ることができぬとすれば、次に考えられるのは、ほかならぬ『村岡伊平治自伝』の本文批判によつて、その内容の真偽を確かめるという方法であろう。けれども、この方法を試みてみると、こんどは、さきにわたしが『村岡伊平治自伝』の信憑性を疑つた第二の理由——伊平治の記述と客観資料の示す事実とのたびたびの食い違いが、大きく問題となつてしまふのだ。

いくつかの例を挙げると、伊平治は明治二十年六月から十一月まで、のちに陸軍元帥になつた上原勇作中尉の従者となつてシベリア奥地を旅行し、そこで多くの日本人海外売春婦を見たことが、彼の海外売春業の動機になつたと言つてゐるのだが、『元帥上原勇作伝』(伝記刊行会編著)によれば、上原はその時期には対馬方面に出張している事が明示されていて、伊平治のことばとは全く合わない。

また伊平治は、明治二十三年十一月にはシンガポールで板垣退助に会い、翌年の十月末には伊藤博文と会見したと言、その会談の模様を会話体で記しているが、当時の新聞記事によるなら、板垣や伊藤はそれぞれ国内の政治活動に奔走した跡が歴然としており、南方へ赴いた様子はない。なお、南洋及日本人社が昭和十三年に刊行した大著『南洋の五十年（シンガポールを中心同胞活躍）』には、明治二十二年から大正十年までの「新嘉坡總領事館日記抄」が収められ、シンガポール訪問者の名は商社員に至るまで洩れなく記載されているというのに、板垣退助・伊藤博文の名はどこにも見ることができないのである。

もう、これで十分なような気がするが、いまひとつだけ例を挙げておくと——伊平治は、明治二十三年の十月に率先してシンガポール日本人会を設立、その会計兼顧問役に就任し、翌年の二月には、からゆきさんたちのための日本人墓地を開設したと手柄顔に語っている。ところが、前記の『南洋の五十年』や、シンガポールに四十年近く開業医として在留した西村竹四郎の『在南三十五年』によると、彼の地の日本人会や日本人墓地の設立功労者は、女郎屋の親方と雑貨店主とを兼ねていた仁木多賀次郎で、村岡伊平治の名は日本人会の役員名簿にも墓地寄金者の名簿にも載っていない。仁木多賀次郎という男は、明治期のシンガポールにおける日本人売春界の最大のボスであったようで、みずから所有地四英反を投げ出して日本人墓地をつくったほか、さまざまな面で在留邦人の利益のために働き、日清・日露の両戦争の折には、売春業者やからゆきさんたちから寄付金を集めて日本政府に献納もしている。『村岡伊平治自伝』にも、日清・日露戦

争にあたって、伊平治がからゆきさんたちから多額の寄付金を集めたことが書かれているわけだけれども、日本人会や墓地の件とあわせて考えれば、あるいは伊平治は、この仁木多賀次郎の業績を自分に習合させて自伝を書いたのではなかろうか——という推測も、成り立たなくはないのである。

わたしたち人間は、自分の過去を直接に知らない人の前では、昔のできごとを美化したり誇張したりして語るという心理的傾向を持つている。そして、美化したり誇張したりしたみずからの過去を人前で繰り返し繰り返し話していると、ついには自分でも、その美化し誇張した過去を、事実として容認するようになって行くものだ。ことに、過ぎし昔を語る当人の現在が不遇な状態であればあるほど、心理的置換反応によって、過去を潤色する度合いが強いのである。『村岡伊平治自伝』は、その「あとがき」に見るかぎり、晩年、長男に先立たれ仕事も思うようではなくなった伊平治が、たまたま知り合った旅行者のすすめで書いたものの由であるが、そうだとすればこの自伝に、事実の美化や誇張がなされているということは十分にあり得ることだ。

わたしは、『村岡伊平治自伝』にかかづらわり過ぎたかもしれない。しかし、海外売春婦研究における最大の資料と目されているこの書物にして、その内容の信憑性しんびょうせいがくのごとしであるとすれば、わたしがさきに列挙したいいくつかの海外売春婦研究は、一体どれだけ信頼してよいと言えるのだろうか。これらの研究が、『村岡伊平治自伝』に大幅に依拠して成り立っているかぎり、それらの書物にたいするわたしの信頼度は、『村岡伊平治自伝』におけるそれと同じにしかなら

ないのである。

むろん、さきに挙げたいくつかの海外売春婦研究には、歴史的事実を報告するというだけでなく、からゆきさんという存在をとおして、日本のナショナリズムそのほかの思想的偏見をおこなうとしたものであり、そうした研究は、事実の真偽や誤差から致命的影響を受けることはないだろう。しかし、もしそうであったとしても、わたしは、それで海外売春婦研究が十分であるとは思わない。

そしてその理由として挙げておきたいのは、前記の海外売春婦研究が、「ドキュメント・日本人」におさめられた森崎和江の著書「あるからゆきさんの生涯」を唯一の例外として、すべて女性の手で書かれているという事実である。わたしは、女性史は女性のみに書くべき資格がある——などという偏見を持っている者ではもとよりなく、むしろ女性史の研究者や読者に男性が積極的に参加することを望んでいるのだが、しかし、売春婦および海外売春婦の研究だけは、女性の手によらなければあきらかにできないところがきわめて大きいと考えるのだ。

明治時代の初期から大正時代にかけて東南アジアへ流出して行つた海外売春婦は、おそらくその九十パーセントが平仮名も書けない文盲であり、当然ながら、彼女らがみずからペンを執つてその生活の実情と苦悩とを訴えるということはできない。かりに彼女らに文章が綴れるとしても、たぶん彼女らは、沈黙を守つて一行も書かなかつただろう。売春生活の機微にわたつて書くこと

に、女性としての抵抗感がつきまとつてゐることもあるが、売春生活を告白することが家またはさきに主張したのはそのためである。

一族の恥になるという思念が、何よりも大きな障壁となつたからである。
とすれば、海外売春婦の本当の姿をつかむには、研究者が、生き残りのからゆきさんから、その生活と思想のすべてを引き出すことから始める以外に、方法が立たないとということになる。そしてそのような方法によつて研究を進める場合、彼女らのセックスの買い手側に属した男性研究者と、彼女らと同じ性に属する女性研究者と、いずれが彼女らの固く閉ざした心の扉を開かせて、掛け合ひなしの話を聞き取ることができるであろうか。その答えは、男性研究者の手によつてなされたこれまでの海外売春婦研究が、いずれも婦女の誘拐方法や経済組織について詳しいのに反して、彼女らの性交実態や心理構造などについてはほとんど言及するところが無く、売春婦研究としては極めて不完全なものでしかないという事が、何よりも雄弁に物語つてゐると言える。

民俗学者の柳田国男は、かつて、『木綿以前の事』におさめた「女性史学」という文章のなかで、女性の知恵と力は、男性のなさんとしてついに及ばぬ領域に發揮されるべきであり、それが眞の女性の学問だ——という意味のことを言つたが、以上の事情を勘案するとき、女性が海外売春婦の調査・研究にたずきわることは、まさしく、その「女性史学」の名にあたいると言つてよいのではないだろうか。わたしが、売春婦および海外売春婦の研究は女性がおこなうべきだと、さきに主張したのはそのためである。
とすれば、海外売春婦の研究を志すわたしは、東京から九州の地に赴いて、老からゆきさんを見つけ出し、その話を聞き取る仕事から始めなくてはならぬわけだ。だが、同性とはいえ行きづ

りの旅人にしかすぎぬ人間に、みずから過去を忘れようと努力して生きている彼女らが、かつての娼婦生活を語ってくれるはずがない。とすれば、わたしに考えられるのは、からゆきさんの生き残る村あるいは家に相当期間住み込んでしまい、彼女らと同じ生活をし、彼女らと哀樂を共にし、そのことによって彼女らの固く閉ざされた心の解きほぐれるのを待つよりほかはないだろう——ということだけである。

しかし、そのように考えてはみたものの、わたしは、彼女らの生き残っている九州の島原や天草の地に、藁ひとすじの伝手つても持つてはいないのである。ただわたしは、福岡県中間市に住み、「あるからゆきさんの生涯」を書いた詩人の森崎和江さんや、天草出身の農民小説家の島一春氏なかもを友人に持つてゐるから、頼めば旧知のからゆきさんを紹介してくれるであろう。

しかしわたしは、敢えて、そのふたつの伝手つてにすがろうとはしなかった。すでに誰かが取材したからゆきさんを訪ねるのは、何だか気が引き立たなかつたし、またこれまでにその聞書が取られてゐるからゆきさんは、現在、割合いに豊かな暮らしをしており、からゆきさんのなかでは出世頭に属する人たちが多かつたからである。

わたしは、そういうからゆきさんではなくて、まだ研究者もジャーナリストも誰ひとり訪ねたことがなく、しかも文字どおり地を這うようにして生きて來た海外売春婦に逢いたかった。そのためには、然るべき人からの紹介などというのではなく、何の威光も特典も持たぬひとりの女として、島原なり天草なりの村に入つて行くのではなくてはならない。そしてわたしは、四年前の夏、

さしあたり瀬踏みのつもりで、天草下島へ出かけたのだが、しかし、この第一回めの天草行きにおいて、はからずも、わたしが逢いたいと願つていてまさにそのとおりの老からゆきさんと邂逅がこうすることができたのであった。

からゆきさんと呼ばれる海外売春婦についての研究とも紀行ともつかないこの書物は、わたしが、この老からゆきさんと三週間あまりひとつ家に生活した記録であり、ふたりの偶然のめぐり逢いが決定的な契機となつてゐる。とすればわたしは、どうしても、その邂逅をもたらした第一回めの天草行きから、語りはじめなければならないのである——